

「文検」と国文学研究：擬似教室空間のなかの文学

KINUGASA, Masaaki / 衣笠, 正晃

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal for Research in Languages and Cultures / 言語と文化

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

192(1)

(終了ページ / End Page)

181(12)

(発行年 / Year)

2023-01-27

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026729>

「文検」と国文学研究——擬似教室空間のなかの文学

衣 笠 正 晃

はじめに

二〇二〇年春以降のコロナ禍のなかにあつて、教育の場ではバーチャルな「学び」のあり方が一般化し、対面授業を前提とした従来の「教室」概念は再考を迫られることになった。しかし改めて考えてみると、対面によらない学びのあり方は日本の教育史のなかで古くから存在しつつづけてきたのであり、また「独学」に対して、肯定的なとらえ方や高い価値づけがなされてきたことに気づかされる。¹⁾

とりわけ近代以降において、「(中学) 講義録」をはじめとする「通信教育」というかたちをとって、メディアと結びついた「孤独な学習」(ラーニング・アロン)²⁾ が多様な展開を見せてきたことが、佐藤卓己らによる共同研究によって刻明にあとづけられている。この研究によれば、それぞれバラバラな存在としての独学者たちが、なんらかのメディアによって媒介されるなかで、独学者同士の一体感、あるいは指導者とのつながりといった「想像の共同体」への参加・関与の意識を獲得していったのである。

本論考では、このような「独学」的な状況のなかにおける文学のあり方を検討する。そのための具体例として、戦前期日本の教育制度のなかに存在した「文部省教員検定試験」(通称「文検」)をとりあげ、その周辺に形成され

た「共同／協働の場」を一種の疑似的な「教室」と見立て、そこにおいて国文学および国文学研究が果たした役割について考察をおこなう。

一 「文検」について

いわゆる「文部省教員検定試験」は、中等教員（師範学校、中学校、高等女学校）、実業教員（実業学校）、高等教員（旧制高等学校）の三つの検定試験の総称であるとされる。³⁾しかし、たんに「文検」と言う場合には、上記三区分のうちで受験者がもっとも多く、したがって社会的な認知度も高かった、中等教員検定（師範学校中学校高等女学校検定試験）。「文検中教」とも呼ばれる）のことを指していた。この中等教員検定の本来の設置目的は、師範学校・中学校・高等女学校の教員資格を試験によって与えることで、明治中期以降拡大を続けた中等教育における教員不足に対応することであった。⁴⁾

この「文検」は、（旧制専門学校以上の高等教育を受けることができなかった）非 \equiv 学歴エリート層にとって、もっとも身近な社会的上昇移動手段の一つであったとされている。⁵⁾おもな受験層を構成したとされるのは小学校教員だが、彼らにとって「文検」合格は、初等教員と比べて大幅に待遇がよく、社会的な地位も高いとされた、中等教員となるための手段であった。⁶⁾さらに、中等教員資格は（旧制専門学校のひとつであった）高等師範学校修了レベルにあたりとされたことから、「文検」合格は高等教育レベルの学歴に相当するものを獲得する手段とも見なされ、例えば一部の官立大学への傍系進学を可能にする手段ともなっていた。⁷⁾

しかし、受験者の急激な増加によって文検合格の難度が上昇し、さらに合格しても中等教員のポストを得ることが難しくなっていくにつれて、⁹⁾文検受験者にとっては、かならずしも検定合格 \equiv 資格取得それ自体が目的ではなくその意義を認められるようになった。

たとえば、自身文検合格を経て国文学（中世文学）研究者となった石田吉貞は、文検受験に失敗した後輩に贈る言葉として、「学問のために払った努力は、決して一分一厘も損にはならない。必ず何処かで役に立つといふことです。〔中略〕試験の成敗など、全局から見ればさう大した問題ではありません」と述べている⁽¹⁾。

このように文検は、十分な学歴を得られなかった人々にとつて、出世欲Ⅱ階級上昇熱を充足する（「ウォーム・アップ」の）手段であつたばかりでなく、かれらが抱く成功への野心を他のかたちへと転化し、諦めをつけさせるという、「クール・アウト」（冷却）の装置としても機能するようになったと考えられるのである⁽¹²⁾。

ところで、近代日本における教養概念についての近年の研究を見ると、かつての唐木順三による明治期の修養主義から大正期の（エリート的な）教養主義へとという変動・対立を強調する図式に対して、両者のあいだの連続性ないし共通性が指摘・強調されるようになって⁽¹³⁾いる。社会的な成功の追求を前提として、そのための克己・努力が強調されるという点で、文検は修養主義の伝統が非エリート層において大正・昭和にも受け継がれていったことの好例と見なすことができるのではないだろうか。

さらに、このような「修養」「教養」と文検とのかかわりを考えるうえで、大正中中に「文検中教」の上に位置する資格として「高等教員検定」（高教）が設置されたことに注目しておきたい。これは旧制高等学校教員の資格を認定するもので、高等師範学校などの専門学校よりも上位の（帝国）大学卒業レベルに相当するとされ、合格者数も限られた、きわめて難度の高い検定試験であつた⁽¹⁴⁾。教員資格としては最高位となる「高教」合格が目標として設定可能となったことで、文検受験層にとつては「中教」から「高教」へと、段階を追って計画的に「学び続ける」ことのプロセスが具体的にイメージできるようになったと考えられる。実際にはそのルートを経て高等教員資格を得られたものはごく少数であつたのだが、目標到達が困難であるからこそ学ぶ意義が深まるという「修養」的な図式は、さらに確固たるものになったと言つてできるだろう。

二 文検国語科の特徴

文検の諸学科のなかでも「国語科」は、その受験者数の多さで知られていたが、志願者にとつてはどのような魅力をもつものだったのだろうか。すでに名前を引いた石田吉貞は、文検中教と高教の双方の合格者であったが、文検国語科の特長についてつぎのように述べている。

有為の質をもつて居ながら、色々の事情のために上級の学校に入ることの出来ない人、小学校教員や下級会社員などで一生を終るに満足し得ない人、さういふ人はすべて文検国語科に來れ。文検国語科こそ、さういふ人のためにのみ設けられたかと思はれる程な絶妙な登竜門である。

その上で石田は、文検国語科の特長を、(一)独学に適している、(二)合格後の就職機会が多い、(三)合格後さらに高等教員検定に向けて研究・向上するのによい、という三点に集約している。⁽¹⁵⁾ たしかに、前述のとおり文検受験層の中心を占めていた小学校教員からすれば、国語は日常の授業のなかで時間も数も多く、教師自身にとつても自習の機会を得やすい学科であった。また、国語教員のポストはどのような中等学校であっても必ず存在しているものであった。

さらにここで、文検国語科では「国文学」の知識が大きな比重を占めていたことに注意しておきたい。文検中教の場合、その試験範囲は「国文解釈」「設問」「作文」の三領域からなっていた。このうちの「設問」のなかには国語学や思想史に関する設問も含まれていたものの、全体としてして見るならば、文検国語科の試験は「⁽¹⁶⁾国語教育」ではなく、古典文学を中心とした「国文学」の知識がおもに問われるものだったと見なすことができる。このことが意味するのは、文検という制度によって、国文学が、資格取得という実際的な目的のために「学ばれる」対象と

して明確に規定されていた、という事実である。そしてその学びにおいて、国文学研究が（国文学アカデミアの外部に存在していた）文検受験者たちの関心の対象となったこと、直接的には試験対策という目的のために消費される対象となったことは、のちに触れるように、出版界における国文学研究の市場形成へとつながっていった。

また前述したような文検と修養とを結びつける観点からすれば、「国文学」は、検定試験準備のための学びの対象となったことで、結果として修養主義的な「人格陶冶」のスキームのなかに組み込まれることにもなったと考えられる。国文学の学びが「修養」のための手段の一つとなったことで、国文学のテキストとその理解を、身につけるべき教養の内実として捉える途が開かれた、と言うこともできるだろう。

このことはいわゆる「大正教養主義」との関連のなかで考えると興味深い。文学を教養の根幹におく考え方は、旧制高等学校におけるエリート文化においても見られた現象である。しかし、学歴エリートにとつての教養とは、彼らが試験勉強や授業を通じて身につけた外国語（欧米語）の知識をベースとした、西洋の人文主義であった。これに対して国文学は、そうした外国語に依拠しない、いわば非エリートにとつての代替的な教養としての役割を引き受けることになったと見なすことができる。一九三〇年代に入つて、大正教養主義を代表する出版社であった岩波書店によって『岩波講座日本文学』が刊行され（一九三一—三三年）、さらに岡崎義恵の著書『日本文芸学』（一九三五年）が出版されたことは、国文学が国民的教養のメインストリームに位置する存在となったことを象徴する出来事である。その前提として、大正後期以降の藤村作（東京帝国大学国文科主任）を中心とした国文学の大衆化路線の推進があったことはたしかだが、さらにその根柢にこのような代替的な教養としての国文学の役割があったことを考えておきたい。

三 メディアを通じた共有空間の形成

つぎにこうした文検国語科が、どのように当時のメディアと関わっていたのかを考えてみたい。日本における本

格的な（高等学校・高等専門学校受験者向けの）受験専門雑誌の登場は大正期前半だとされているが、ほぼその同時期（一九一五年）に文検専門の受験雑誌『文検世界』（国民教育会）が創刊され、昭和期に入ると競合誌『文検受験生』（大明堂）が刊行を開始している（一九二九年）。両誌はいずれも国語科に限定されない文検全般の受験対策をテーマとしており、過去問の解説や合格者体験記、試験官からのアドバイスなどを主な内容とするものであった。

さらに、このような文検総合誌と並行して、文検合格者が著者となった各学科の学習手引書が刊行されるようになった。最初期は過去問の整理・解答提示にとどまっていたものが、次第に既存の参考書や研究書の整理・紹介、必修事項の解説を加えた、当該科目についての総合的な指導書となつてゆくが、その過程で著者自身の体験にもとづく受験にあつたのアドバイスや、文検に向けて学ぶ意義の解説という修養的側面に重点が置かれるようになる。国語科の場合、総合的指導書の嚆矢は石川誠による『文検受験用国語科研究者のために』（大同館、一九二三年）あたりであると考えられるが、一九二〇年代後半以降、大同館、啓文社などの受験関連図書を専門とする出版社から類書が多く刊行されるようになった。

右に述べた文検総合誌を補うかたちで刊行されたのが、同人誌的国文学雑誌である。その例として、岡田稔が主宰した名古屋国文学会の『国漢研究』（一九二九年創刊）、新屋敷幸繁が主宰した日本国文学研究社（のちに九州国文学会と改称）の『日本文学』（一九三一年創刊）などを挙げる⁽¹⁸⁾ことができる。これらの雑誌は、地方における国文学研究組織の機関誌というかたちをとっており、指導者による一方的な教授ないし情報伝達ではなく、会員⇨文検受験者に共に学ぶ同胞としての意識を育み、その結びつきのなかで自主的な学びの姿勢を身に付けさせることが目指されている⁽¹⁹⁾。

この両誌に共通する点として指摘できるのは、読者として明らかに文検受験層を想定していながら、文検に関しての直接的な情報の量は限定されているということである。両誌とも、むしろそれ以外の文章——『国漢研究』では古典研究に関する論考、『日本文学』では批評や詩などの創作——が多く掲載されており、このことから検

定合格という実利面だけでなく、文学ないし文学研究を通じて同人＝参加者に（文検総合誌では得られない）一体感を体験させることが、これらの雑誌の編集方針において目指されていたことがうかがえる。⁽²⁰⁾

上述した文検関連雑誌（総合誌・同人誌）においては、誌面をいわば擬似教室空間としようとする演出があったと見ることができ、それとつながるものとして、文検受験者を主たるターゲットとした国文学講座という出版企画にも触れておきたい。大正末以降の出版ブームのなか、新潮社は予約出版としての『社会問題講座』（一九二六―二七年）成功の余波に乗って、同じ「講座物」である『国文学講座』の刊行を開始する（一九二七年。完結は翌二八年）。この『国文学講座』自体、読者として文検受験者を想定したものであったが、その翌年（一九二八年）に、同じ予約出版として京都・文献書院から『国文学講座』が刊行されている。この講座では「僅か一年間で中等教員国語科検定試験に合格せしめんとする空前にして又絶後なるべき画期的の大計画」と謳い、文検中教の「国文解釈」での類出作品の解説を中心として、「設問」での出題対象となった国語史や国文法の概説など、多様な講義が配されていた。注意しておきたいのは、配本ごとに質疑応答欄が設けられており、購読者の質問とそれに対する講師の回答が記載されていたことである。むしろこれは個々の学習者に対応したかたちでの通信教育とは異なるものだが、講座刊行の途次において購読者に少なくとも同学者の存在を意識させ、独学者としての孤独感を教室的な雰囲気によって緩和するという効果を認めることができるだろう。⁽²³⁾

四 国文学アカデミアと文検

さらにここで注目しておきたいのは、この文献書院による『国文学講座』の執筆者（講師）の多くが、京大教授の吉澤義則、藤井乙男をはじめとして、折口信夫、尾上八郎、垣内松三らを含めた国文学アカデミアのなかの研究者であったこと、さらにこの出版企画自体が京大系を中心とする比較的若手の研究者に執筆の機会を与えるものとなっていたことである。このことから「文検」がアカデミアの国文学研究にとっても一つの出版市場となってい

たことがうかがえる。⁽²⁵⁾

これと並行して、文検受験者の側も、アカデミックな研究に対して、受験対策という観点から注目されるようになってゆく。文検中教と高教との連続性が強調され、中教志願者にも高教を視野に入れた受験計画が推奨されるようになる⁽²⁶⁾。国文学界の動向に関心と理解をもつことが受験準備として欠かせないものとなっていった。

たとえば文検高教合格者の峯岸義秋は、「高教の問題は国文学界の傾向をさながらに表象する」ため「高教の受験者は国文学界に対して先づ感覚を鋭敏にしておかなければならない」と述べており、その例として、岡崎義恵と久松潜一が試験委員となった第四回（昭和二年）以降に「文学論的な問題」が増えたこと、「純粋文学的研究が国文学界に加味された」ことを指摘している。⁽²⁸⁾

実際にはすでにそれ以前から文学理論や文学思潮に関しては問われており、大正九年の中教では「我が国現代の文学に現れたる思想上の傾向について述べよ」、同年の高教では「文学上の自然主義・象徴主義の意義如何」という設問があった。しかし、たしかに昭和期に入ると、とくに高教では、「鑑賞作用と創作作用とに就いて述べよ」「最近の文学思潮」（昭和二年）、「明治文学に現れたる浪漫精神」（昭和六年）、「明治文学に於ける自然主義作品の特質を述べよ」（昭和八年）、「日本文芸学の提唱を論ず」（昭和十年）、などといった問題が目立つようになっていく。

峯岸がその名前を引いた岡崎義恵は日本文芸学、久松潜一は日本文学評論史（批評史）の確立者であり、明治以来の国文学研究の流れのなかにあって新しい学問的アプローチを模索した、理論志向のつよい研究者であったといえるだろう。上記のような文学論的問題の出題に両者がどれほど関与したのかは不明だが、両者に共通する「あれ」「まこと」「幽玄」といった理念型による日本文学の整理が、文検志願層にとっては（受験勉強的な意味においても）文学史理解の明確な指針となったであろうことが推測される。

ここでは、そうした理論志向が研究の再生産にもつながったことを指摘しておきたい。上述の峯岸は高教合格（一九二九年）の後、『国文学の批評的研究』（山海堂出版部、一九三二年）、『歌論史概説』（春陽堂、一九三三年）と、二冊の研究書を相次いで刊行しているが、前者の「自序」において「此の書の研究方法については久松潜一氏

の研究に負ふところが多い」と述べ、後者の「自序」の追記では久松の「歌学史の研究」(『岩波講座日本文学』所収)に深い啓示を受けたとして、この書物を久松に献呈するとしている²⁹。短期間のうちでの方法論の適用ないし応用が可能だったのは、久松の批評史研究が理論的に整理されたものであったがゆえだろう。峯岸と久松のケースでは、久松の理論志向型の研究が検定受験に役割を果たし、さらに検定合格者である峯岸の研究方法ないし姿勢として再生産される、という流れを看取することができる³⁰。

おわりに

文検国語科を目指す独学者たちは、主に参考書や雑誌といった出版物を介して学びを進めるとともに、それらが醸し出す教室的な雰囲気の中身に身を置くことになった。そこで学ばれる対象であった国文学／国文学研究は、学習者を(「修養」的な意味づけを含めて)結びつけるという役割を果たしたと考えられる。さらにこの「学び」の共同体は、国文学アカデミアをもその参加者として含みこむかたちで拡大してゆくことになり、国文学の大衆教養化を推進するものとなった。

ポストコロナという状況のなかで、「教室」のあり方、そのなかでの学びのあり方は、今後さらなる変化を迫られることになるだろう。そうした状況のなかで文学研究・文学教育はどのような展開を見せることになるのだろうか。戦前期における「文検国語科」の例からは、もともとは試験合格・資格取得というきわめて実利的な目的から出発した文学へのかかわりが、結びつきの意識や教養の共有へとつながってゆくあり方を見ることができるといえる。このような「独学」の機構から、われわれは文学がもつ機能についての新たなとらえ直しのヒントを得ることができるとはならないだろうか。

注

- (1) 前者については、中世以来の和歌・俳諧の(書簡のやりとりによる)添削指導などが代表例として考えられる。また後者については、アカデミアに所属する研究者による「独学」の賞揚として、加藤秀俊「独学のすすめ」(文芸春秋社、一九七五年)、さらに近年の柳川範之による一連の著作(『東大教授が教える独学勉強法』草思社、二〇一七年、など)が挙げられる。
- (2) 佐藤卓己・井上義和(編)『ラーニング・アロン——通信教育のメディア学』(新曜社、二〇〇八年)を参照。
- (3) さらに師範学校・高等学校の専攻科教員検定を含めて四分野とする区分法もある。
- (4) 明治期以降の中等教員養成の中心とされたのは(帝国)大学と高等師範学校であったが、両者の卒業生だけでは必要な教員数を充足できなかった。「文検」は、各地に設置された臨時教員養成所とあわせてそうした教員不足を補う手段となった。なお「文検」の制度全般については、寺崎昌男・「文検」研究会(編)『「文検」の研究——文部省教員検定試験と戦前教育学』(学文社、一九九七年)、および同『「文検」試験問題の研究——戦前中等教員に期待された専門教職教養と学習』(学文社、二〇〇三年)を参照。
- (5) 天野郁夫『日本の教育システム』(東京大学出版会、一九九六年) 第二部第六章「独学と講義録」、同『学歴の社会史——教育と日本の近代』(平凡社、二〇〇五年)「14 教員社会」を参照。
- (6) 初等教員の養成機関であった師範学校は一九四三年以前においては中等学校レベルであった。また師範学校を経ず、検定試験によって資格を得た初等教員も多かった。
- (7) 野口綱齋(編著)『官立大学傍系者・独学者入学受験法』(大明堂、一九三五年)では「高等学校」「予科」(文理大の場合の)高師(高等師範)を経るコースを「正系」とし、中学卒業者が聴講生となり本科に編入するコース、「専門学校」「文検(中教)」を経るコースを併せて「傍系」としている(同書七—八頁)。
- (8) 文検国語科(漢文を含む)の場合、一九二〇年と一九二八年の受験者数を比較すると、二六三人から二二一九人へと八倍以上の増加を見せている(寺崎ほか(編)『「文検」の研究』四四頁)。
- (9) 昭和期に入り中等教員に占める(帝大以外を含めた)大卒者の比率が増加するにつれ、文検合格者の比率は減少していった(山田浩之『教師の歴史社会学——戦前における中等教員の階層構造』見洋書房、二〇〇二年、八八頁)。
- (10) 石田吉貞は高等小学校卒業後、検定試験をへて小学校教員となり、文検中教、文検高教(いずれも国語科)に合格。戦後大正大学教授となった。

- (11) 大月静夫(石田吉貞)『若き検定学徒の手記』(大同館、一九三九年)、一一〇—一一一頁。
- (12) 「ウォーム・アップ」と「クール・ダウン」の定義および相関性については、竹内洋『立志・苦学・出世——受験生の社会史』(講談社、一九九二年)第五章「苦学と講義録の世界」を参照。
- (13) 唐木順三『現代史の試み』(筑摩書房、一九四九年)、筒井清忠『日本型「教養」の運命——歴史社会学的考察』(岩波書店、二〇〇九年)、および筒井(編)『大正史講義(文化篇)』(筑摩書房(ちくま新書)、二〇二二年)第四講「大正教養主義——その成立と展開」、を参照。
- (14) 「高教」の制度や合格者についての詳細な研究として、儀同保『独学者列伝』(日本評論社、一九九二年)を参照。
- (15) 大月静夫(石田吉貞)『最新指導文検国語科受験法』(大同館、一九二九年)、一—三頁。
- (16) なお制度発足後に「教育(ノ)大意」「国民道德要領」が追加された。また国語と漢文が国漢科として一つにされていた時期もあり、区分後も予備試験では漢文が必修だった。小笠原拓『文検国語科』の研究(二)——その制度と機能について』(『地域学論集』四—一、二〇〇七年)を参照。
- (17) 竹内洋『立志・苦学・出世——受験生の社会史』(講談社、一九九一年)第三章「受験雑誌の誕生」を参照。
- (18) 岡田稔および新屋敷幸繁はいずれも文検中教合格者であり、上述の石田吉貞と同じ一九二七年に、文検高教国語科に合格している。新屋敷は一九二九年に第七高等学校教授となっており、戦後には沖繩大学学長を務めた。岡田についてはその自伝『奔流の如く——ある独学学徒の歩める道』(蓬左書房・誠和書院、一九五四年)を参照。
- (19) 「国漢研究」の会則(「国漢研究会清規」)では「文検程度ヲ標準トシ国漢文ノ研究ヲナシ、カネテ独学者ノ大同団結ヲ計ル」ことを会の目的として掲げている。
- (20) 「国漢研究」の「創刊の辞」(一九二九年四月創刊号、一頁)では「本誌は斯道大家諸先輩の高論名説の御寄稿を乞ふは勿論であります、尚会員諸氏の研究発表をなす自由機関たらしめようと思ひます」と述べている。
- (21) 「日本文学講座」の予約募集パンフレット(一九二六年九月十日発行)では、本講座を薦める対象を説明して「すべての知識人に」「一般の知識階級に」「文芸に志す人々に」「古典叢書の読者に」「国語科教員諸氏に」と並べて「検定試験の準備に」という項目を立て、中等教員試験受験者に対して実際の指導を施す、としている(一八頁)。
- (22) 「国文学講座」内容見本表紙の惹句による。
- (23) なお文献書院は「国文学講座」に続けて『続国文学講座』『江戸文学講座』を刊行している。

- (24) 「国文学講座」内容見本の「本書の特色」では「講師は帝大、高師、女高師及び専門学校等の代表的大家」であるとしているが、たとえば講師のうち風巻景次郎（一九〇二年生まれ）は前年の一九二七年に大阪女專に着任したばかりの若手であった。なお出版元の文献書院は京大国文科の機関誌『国語国文の研究』の刊行元でもあった。
- (25) アカデミアの主流と文検との関係を考えるうえで、たとえば久松潜一（一九三六年より東大国文科主任）を例にとると、主著『日本文学評論史』（一九三六年刊行開始）の広告では同書を「文検受験者絶好の参考書」と謳っており（『日本文学評論史総論・歌論篇』至文堂、一九三八年の巻末広告）、また『文検世界』の出版元である国民教育会から編者『日本文学史講話（上巻）』を刊行している（一九三七年）。
- (26) 石川誠『文検国語科受験及就職の手引』（大同館、一九三三年）では、とくに文学史について国文学研究の進展が著しいとして、東大の『国語と国文学』、京大の『国語・国文』という専門研究雑誌の参照を推奨している（一〇六頁）。
- (27) 峯岸義秋は小学校教員から文検中教を経て、一九二九年に文検高教国語科に合格し、一九三八年に第二高等学校教授となっている。
- (28) 峯岸義秋『文検中等教員高等教員国語科独学受験法』（大明堂、一九三五年）九二―九三頁。なお以下の記述において問題の出題年次は和暦で示す。
- (29) 峯岸は高教試験合格まもなく久松宅を訪問した際に今後の研究テーマを問われ、「歌論のようなもの」と答えていた。その後書物にまとめる計画を久松に伝えたところ援助を約束され、それで「安心して、あわたたくし作りあげた」のが『歌論史概説』であるという（峯岸義秋「歌論史のことなど」『国語と国文学』久松潜一博士追悼特集、一九七六年七月特集号、二三頁）。
- (30) なお文検（高教）出身の研究者の理論志向については、独学者としての研究環境の問題を考慮に入れる必要がある。中世文学研究者の荒木良雄（一九二五年文検高教国語科合格。姫路高等学校教授）は「わたくしには、立派な先生方の直接の指導や、図書館の恩恵をうける大学生生活の幸運が与えられていませんでした。自然、独学でも可能な、文学理論の研究ということに偏ってゆきました」と回想している（甲南大学文学会（編）『荒木良雄博士喜寿記念論文集』甲南大学文学会、一九六六年、四頁）。